# 解釈 Q の何が問題なのか？

榊原英輔

## 1. はじめに

クリプキその著書『ウィトゲンシュタインのパラドックス』において、一回一回の規則の適用は「暗闇の中における正当化されない跳躍」であると主張した[1]。クリプキはこの結論から、正しい言語使用を誤った言語使用から分かつのは共同体の振る舞いの一致であるという共同体説(community view)を提示し、私的言語の不可能性はそこから導かれると主張した[2]。

仮に、私たちがこれまで 58 以上を被加数とする足し算をしたことがなかったとしよう。この時クリプキの懐疑論者は、「58+67」に対する正しい答えは「5」であったのではないか、と問いかける。懐疑論者によれば、自分がかつて「+」の記号によって、次のようなクワス関数⊕を意味していたという可能性は排除できないからである。

$$a \oplus b = \begin{cases} a + b & (a < 57 \text{ and } b < 57) \\ 5 & (\text{otherwise}) \end{cases}$$

懐疑論者に対する私たちの自然な反応は、「このような奇妙な解釈は受け入れがたい」というものであると思う。「58+67」に対する正しい答えは「125」であると誰もが考えるだろう。クリプキは、このような反応を承知している。しかしクリプキは、そのような反応を認めた上で、それは根拠のない恣意的な判断であり、根拠と正当化を欠いていると切り返す。

クリプキは、懐疑論者の挑戦に応じるために満たさなければならない二つの条件を次のように纏めている[3]。第一の条件は、言葉の意味を構成している事実が何であるかを明らか

---

[1] Kripke 1982, p. 10 [邦訳 p. 18]. 本論文は、クリプキのウィトゲンシュタイン解釈としての妥当性にはついては扱わず、あくまでクリプキの議論に対して反論を行っていく。

[2] 本論では 3 節で述べる理由から、「意味の規範性(semantic normativity)」という用語は避けることにする。

[3] Ibid., p. 11[邦訳 19]を見よ。クリプキが自身の問題を定式化するために用いる“What I meant X by Y”という表現は、問題が私の意図であるか、言葉の意味であるかをあいまいにするものである。クリプキの真意は、志向的なもの全体に対して懐疑論を提出することであったと思われる。一方で、心的な志向性と言語的な志向性は別に論じるべきという意見もある（例えば、Boghossian (2003)）。本論では専ら言葉の意味についての懐疑論を吟味するが、その際に心的な志向性を参照することを手控えることで、クリプキが志向的なもの全般を問題としていたことを尊重することにする。このため、参照できる事実は非志向的な事実に限られることになる。クリプキは、参照する事実を話者の個人的事実に限定すると書いている。しかし参照する事実を非志向的事実全体に拡張しても、議論の本質には

にすることである。そして第二の条件は、意味を構成する事実によって、言語の特定の使い方――例えば「68+57」に対して「125」と答えること――がいかにして正当化されるのかを示すことである。二つの条件を合わせると、懐疑論に応答するため必要十分であるのは、特定の言語的振る舞いを正当化するのに十分な事実であることになる。

特定の言語的振る舞いを正当化する客観的な事実が存在しないのだとすると、言語活動が規則遵守の活動であるために不可欠な、正しい振る舞いと誤った振る舞いの区別は危機に瀕することになる。そして、正しい振る舞いと誤った振る舞いの区別を回復するためには、共同体の多数派との一致と不一致を参照することが必要となり、規則遵守についての共同体説と、私的言語の不可能性が自ずと導かれることになる。逆に、特定の仕方で振る舞うことを正当性する客観的な事実が存在するなら、規則に従うために共同体の存在に頼る必要はなくなるだろう。

クリプキはまず、過去の言語使用の事実は将来の特定の言語的振る舞いを正当化するのには不十分であると論じる。この過程でクリプキが援用するのは、高々有限である過去の言語使用の事実と整合的な解釈は無数に存在する、という決定不全性テーゼである。これまで、言語解釈の決定不全性は、対立仮説の具体例が提示されることなしに前提されてきた。確かに、クリプキはクワス関数という例を出している。だが「＋」がクワス関数を意味するというのは、対立仮説の候補となるかもしれない言語解釈の断片に過ぎない。実際、「＋」はクワス関数を意味するという解釈は、現存する証拠と矛盾しているのではないかという反論に晒されている。例えば、このままでは交換法則を表す“$\forall x \forall y \forall z\ (x + y) + z = x + (y + z)$”が偽となってしまうだろう。実際クリプキは、反対者からのこのような応答を予期しており、反論が提出されるたびに、“∀”などの他の記号の意味を調整していけばよいと提案している(Ibid., p. 16f)。ところが、このような調整が有限のステップで終了し、安定的な解釈に収束するという保証はない。対立解釈を作るためには、一つの単語に対して再解釈を施すだけでは不十分であり、言語全体にわたる再解釈が必要となるはずなのである。テナントはこの不備を指摘し、クリプキの懐疑論を「鬼火(will o’ wisps)」であると不満を述べたが、それはまったく正当なことであった（Tennant 1997, p. 101）。

近年榊原は、標準的な解釈 C から、解釈 Q という対立解釈(alternative interpretation)を派生的に構成できることを証明した（Sakakibara 2012）。これにより、クリプキの懐疑論は鬼火から受肉したデモンになったわけである。様々な思考実験の有用性に示されているように、哲学的問題は具体例に即して考えることが重要である。具体例を欠いた状態では、人は二つの極端な意見に傾きがちである。一方では、テナントのように、懐疑論の現実性自体に懐疑的となる者が出てくる。他方では、見えない敵に対する脅威を過大評価し、正体が分かれば解決可能な問題を、解決不可能であると誤認してしまう可能性がある。

クリプキの懐疑論に対しては、既に膨大な議論の蓄積があるが、これらの議論は具体例を欠いたままなされてきた。したがって、具体例に即した考察を付け加えることは、クリプ

---

影響しないため、個人的事実という制約にはこだわらないことにする。

キが召喚したデモンの威力を見定めるために、なお一片の価値を有していると思われる。私がとりわけ強調したいことは、対立解釈自体の特徴を吟味することはこれまで不可能だったのに対し、今やそれが可能になったということである。本稿で私は、対立解釈自体が有する特徴が、標準的解釈に従った言語的振る舞いを正当化するという主張を擁護するつもりである。解釈 Q には、解釈 C にない問題があり、この違いが解釈 Q ではなく解釈 C を選択することの実践的な理由を我々に与えてくれると思われるのである。

2 節では、榊原(2012)を参照しながら解釈 Q を紹介する。3 節では傾向性説の誤りを、言語的振る舞いの正当化という観点から確認したい。4 節では、解釈 C と解釈 Q を 3 つの観点から比較し、前者が優れていることを示す。5 節では、言語活動は私たちの実践であり、意味の良さが特定の言語的振る舞いを正当化する実践的理由になると論じ、これに対する反論を検討していく。

## 2. 榊原の解釈 Q

榊原は最近、解釈 Q という言語の対立解釈の具体例を提案し、対立解釈に必要とされる特徴を実際に備えていることを証明した。榊原によって示されたのは代数学の非標準的解釈であり、同じ技法が自然言語にも応用できるかどうかは明らかではない。だが具体例に即して懐疑論を検討するという目的にとってはこれで十分である。本節では、榊原(2012)に沿って、解釈 Q がどのように定義されるかを見ていく。解釈 Q が必要とされる条件を満たしていることの証明は同論文に詳述されているため、ここでは結果のみを述べることにする。

解釈 Q は、代数学の言語の標準的な解釈 C から派生的に定義される。その定義に際しては、まず Q 化の手続きというものの定義が必要である。最初に全単射であり、一定の数以下で $x=q(x)$となるような関数を考える。例えば、

$$q(x) = \begin{cases} x & (x \leq 1000) \\ 2x - 1000 & (x > 1000) \end{cases} \tag{2.1}$$

以後は、$x = q(x)$が成り立つかどうかの境界となる点を屈曲点と呼ぶことにしよう。上の関数では屈曲点は 1000 である。

数関数、述語、論理定項はそれぞれ入力と出力を持っており、広義の関数とみなすことができる。違いは、どのような種類の入力を受け、何を出力するかである。数関数においては、入力と出力は共に数である。述語においては、入力は数であるが出力は式である。そして論理定項では、入力も出力も式である。このように考えると、任意の n 項関数 F の Q 化は次のように定式化できる。

**Q 化の手続き：任意の自然数 $k(1 \leq k \leq n)$について、F の k 番目の入力が数 $x_k$ であるならそれを $q^{-1}(x_k)$に置換し、F の出力が数 y であるならそれを $q(y)$に置換せよ。**

Q 化の手続きから、任意の n 項数関数 f を Q 化した Qf は次のように定式化できる。

$$Qf(x_1, x_2, \cdots, x_n) \overset{\text{def}}{=} q\left(f\left(q^{-1}(x_1), q^{-1}(x_2), \cdots, q^{-1}(x_n)\right)\right). \tag{2.2}$$

例えば、

$$a\ Q{+}\ b\ = q\left(q^{-1}(a) + q^{-1}(b)\right)$$

$$Q\sin(x) = q\left(\sin\left(q^{-1}(x)\right)\right)$$

である[4]。また、任意の n 項述語 P を Q 化した QP は次のように定義される。

$$QP(x_1, x_2, \cdots, x_n) \underset{\text{def}}{\Leftrightarrow} P\left(q^{-1}(x_1), q^{-1}(x_2), \cdots, q^{-1}(x_n)\right). \tag{2.3}$$

例えば、

$$a\ Q{<}\ b\ \underset{\text{def}}{\Leftrightarrow} q^{-1}(a) < q^{-1}(b)$$

$$a\ Q{\in}\ A\ \underset{\text{def}}{\Leftrightarrow} q^{-1}(a) \in A$$

である。等号は述語の一種であるが、Q 化によって意味が変わらないため「Q」を省くことにする。このように定義された Q 化の概念を用いて、解釈 Q は次にように定義される。

---

[4] q をどのように定義しても Q+はクワス関数⊕と同じ関数になりえないことは、次のような背理法によって証明できる。q を適切に定義すれば Q+が⊕と等しくなると仮定すると、

$$x \oplus y\ = q\left(q^{-1}(x) + q^{-1}(y)\right). \tag{2.6}$$

(2.6)の両辺に $q^{-1}$ を適用して、

$$q^{-1}(x \oplus y) = q^{-1}(x) + q^{-1}(y). \tag{2.7}$$

(2.7)に $x = 57, y = 68$ を代入すると、

$$q^{-1}(5) = q^{-1}(57) + q^{-1}(68). \tag{2.8}$$

さらに、(2.7)に $x = 57, y = 69$ を代入すると、

$$q^{-1}(5) = q^{-1}(57) + q^{-1}(69). \tag{2.9}$$

(2.8)と(2.9)より、

$$q^{-1}(68) = q^{-1}(69).$$

となり、矛盾が導かれる。したがって、「＋」をクワス関数と解釈した場合に、全体として整合的な対立解釈が構成可能であるかどうかは、未だ明らかではないことになる。

**解釈 Q : 解釈 Q は、関数記号が、その記号が解釈 C において意味する関数を Q 化してできる関数を意味し、数字は解釈 C と同様の意味を持つと解釈するような解釈である。**

例えば、“$\forall x(x > 2 \rightarrow x + x < x \times x)$” は解釈 Q においては、$\forall x(x \; Q{>}\; 2 \rightarrow x \; Q{+} \; x \; Q{<} \; x \; Q{\times} \; x)$ を意味することになる。また、関数 q が(2.1)のように定義される場合、“$1016 + 12 = 1040$” や “$700 + 500 = 1400$” は解釈 Q において真である。

(2.2)と(2.3)を f、P についてそれぞれ解くと、以下の式が得られる。

$$f(x_1, x_2, \cdots, x_n) = q^{-1}\left(Qf\big(q(x_1), q(x_2), \cdots, q(x_n)\big)\right), \tag{2.4}$$

$$P(x_1, x_2, \cdots, x_n) \Leftrightarrow QP\big(q(x_1), q(x_2), \cdots, q(x_n)\big). \tag{2.5}$$

(2.4)と(2.5)が示しているのは、元の関数と述語は Q 化された関数と述語、および関数 q を組み合わせることで定義できるということである。これに加えて、関数 q は Q 化された関数を用いて定義できることが証明できるため、Q 化された関数と述語群と、元の関数と述語群は、q と $q^{-1}$ が入れ替わっていることを除いて、ほぼ対称的な相互定義可能であることになる。

関数 q を変更することで、無限に多様な解釈 Q を作ることが可能である。そこで、関数 q の屈曲点を、私たちがこれまで言及したことのある全ての数より大きな数に設定すれば、解釈 Q は以下の 5 つの特徴を持つことが証明される。

1. 多くの人に何度も用いられてきた代数学の記号の意味を体系的な仕方で改変する。
2. 今までに言明された全ての代数の文の真理値を保存する。
3. これまでに言明されたことのない代数の文の中には、標準的解釈とは異なる真理値を割り振られるものがある。
4. 等号記号および論理記号の意味を変えない。
5. 標準的解釈と、ほぼ対称的な形で相互定義可能である。

榊原は、単にクリプキが必要としていた対立解釈の具体例を示しただけでなく、相互定義可能性などの追加的な特徴を備えた対立解釈が存在することを証明した。したがって、解釈 Q の証明は、有限の事例は無限の仕方で解釈可能であることは自明だ、と考えていた者にとってもニュースを含むことになる。

クリプキのクワス関数は反例に次々と対処しなければならず、テナントによって「鬼火」であると揶揄された。しかし解釈 Q を用いれば、クリプキの懐疑論は簡潔かつ具体的に定式化できる。仮に、私たちがこれまでに用いたことのある数字はいずれも 1000 よりも小さいものであったとし、q が(2.1)のように定義されているとしよう。クリプキの懐疑論者は次

のように言うだろう。「「1016 + 12」に対する正しい答えは「1040」かもしれない。なぜなら解釈 C だけではなく解釈 Q も、過去の全ての言語的振る舞いと整合的だからである。」私たちはこのような懐疑論者に対して、何が言えるのだろうか。

## 3. 傾向性説はなぜ誤っているのか？

クリプキは、言語使用の先例から意味が決定できないと論じた後、話者の傾向性や、心像も意味を決定する力を持たないと論じた。クリプキの議論は、解釈 Q に対しても同様に有効である。本節では、特に重要な傾向性説について簡単に振り返ることにし、傾向性説の誤りを、振る舞いの正当化という観点から振り返ってみたい。

傾向性は意味と同一視できないという議論としては、二つのものが有名である。一つ目は、大きな数同士の演算について、私たちはそれに回答する傾向性をそもそも有していないというものである。二つ目は、傾向性は誤りの可能性を説明できないということである。これらの論点は、そのまま解釈 Q にも適用可能である。ここでは、大きな数同士の計算について考えてみよう。解釈 Q の強みの一つは、関数 q を調節することで、無数に多様な対立解釈を生みだすことができる点である。そこで、関数 q の屈曲点を今までに言及したことが無い数の中でも、私たちが能力的に扱うことができる範囲を超えているくらい大きな数に設定することにしよう。この場合、私達の持つ傾向性は、解釈 C とも解釈 Q とも整合するため、どちらが正しいかを定めるのには役立たたなくなるであろう。

単純な傾向性説は、様々な形で修正されてきた。上述の二つの批判を回避するために、意味を、ある理想的な前提条件が満たされた場合に私たちが振る舞う傾向にあるものと同一視するという修正案が出されている[5]。だが、この議論の詳細について、ここで追いかけるのは止めておく。というのも、クリプキがはっきりと指摘しているように、意味の傾向性説は「的外れ」だからである。クリプキは「傾性論者の説明は――私の現在の反応を正当化するところの、過去の事実を見出す、という――懐疑論者の問題を、誤解していると思われる(Kripke 1982, p. 46)」と述べている。1 節で述べたように、私たちが直面している問題は、「57+68」という問いに「125」と答える際、どのような事実が私たちの振る舞いを正当化するのだろうかということである。特定の振る舞いのみが正当化されるのであれば、意味が実在すると言えるし、そのようなものが無いのであれば、意味は実在しない。それゆえ問わなければならないのは、傾向性に私たちの振る舞いを正当化するという役割が果たせるものかどうかである。

言語使用の先例(precedents)は、正当化のために引き合いに出すことのできる代表的なものである。私たちは、「〇〇と言うのは正しい。なぜなら過去に××と言われてきたという先例があるから」と主張して、自らの振る舞いの正当化を試みることができる。私たちが辞書を引き、過去の用例を参照するのは、先例に振る舞いを正当化する力があるからに他

[5] 総説としては、Boghossian 1989, p. 537-40 を参照。

ならない。これとは対照的に、「〇〇と言うのは正しい。なぜなら、私たちは〇〇と言う傾向性がある（be disposed to）から」と主張することはできないだろう。傾向性は振る舞いを正当化することはできない。傾向性はむしろ、先例などを引き合いに出して正当化される必要のあるものなのである。傾向性説の根本的な問題は、私たちが言語使用を正当化する際に参照する（refer）もののリストの中に、傾向性は最初から入っていないということである。（理想条件下での）言語的傾向性によって決定される振る舞いと、言葉の意味によって決定される振る舞いがどれほど似ていたとしても、それは無関係である。正当化の際に参照するものではないということは、傾向性は意味を構成する事実(constituting fact)の一部ではないということなのである。

クリプキは「懐疑論者に答えるために引用され得る事実については限界がない(Ibid., p. 14 [邦訳 p. 24])」と宣言しているにもかかわらず、将来の言語使用の事実に言及しなかったのも、同じ理由からであろう。すなわち、「〇〇と言うのは正しい。なぜなら、私たちは将来〇〇と言うであろう（will）から」と主張するのは、「私たちは〇〇と言う傾向性があるから」と主張と同じくらい的外れである。傾向性と同様、未来の行為は現在の行為を正当化する役割を担うことができない。未来の行為はむしろ、正当化を必要としているものなのである。

ここから分かることは、過去の言語使用は現在（あるいは近い過去）の言語使用を正当化するために参照することができるのに対し、未来の言語使用は、それを何らかの方法で予め知ることができたとしても、現在（あるいは近い過去）の使用を正当化するために参照することができないということである。正当化の役割に着目すると、過去と未来は非対称な関係にある。傾向性は、この時間的な非対称性に対して感受性を持たないという点からしても、意味を構成する事実とはなりえないのである。

クリプキは、正当化の役割という観点からの批判に加えて、記述と規範の対比を用いて傾向性説の誤りを説明している。彼は「私が「＋」によってアディションを意味する事と、私がそれと一致しようと意図する事が、「68+57」という問題に答えるという未来の行為に対して有する関係は、規範的なのであり、記述的ではない（ibid., p. 37 [邦訳 p. 71]）」と述べ、意味は規範的であると主張する。対して傾向性は、私たちが「57 + 68」に対して「125」と答えるだろう（will）という事実を指し示すだけであり、規範的な役割を果たせないと論じられる。

だが意味の規範性に対しては近年数々の批判が加えられている[6]。本論ではこれらの批判は扱わないが、私は諸家の批判は妥当なものだと考える。そこで、傾向性が正当化の役割を果たせないという批判は、意味が規範的でなかったとしても有効だという点を強調しておきたい。傾向性説に対するクリプキの批判を見るならば、正当化の役割を果たせないという点が主要な論点であることが分かる。規範性という論点からの傾向性説の批判は、補助的な役割に留まっているのである。

[6] 代表的なものとしては、Wikforss (2001), Bogghosian (2003), Hattiangadi (2006)がある。

## 4. 言語 C は言語 Q よりも良い

クリプキの懐疑論者は、「＋」が加算を意味するという説も、Q+を意味するという説も同等の経験的支持を取り付けており、一方が正しいと判断するのは恣意的であると主張する。しかし、このような結論は私たちの直感に反している。私たちは、「＋」が意味するのはQ+ではなく加算だと考えている。さらに、そのように考えるのは恣意的な思いつきではなく、正当化されていると感じているのである。しかし、私たちの直感を裏付けるものはこれまで見つけられていない。言語使用を正当化する際に私たちは先例を参照できるが、先例だけでは解釈 C を正当化するのに十分ではないのであった[7]。また傾向性は、正当化のために参照できるものではないことが確認された。解釈 C の証拠となり、解釈 Q の証拠とはならないような事実を見出すという課題は行き詰まったかに見える。しかし私たちは、解釈 Q は何かおかしいと感じるだろう。この直感は、私たちがまだ言語化できていないものがあるということを示唆している。ウィトゲンシュタイン流の静寂主義(quietism)であれば、我々は「岩盤(bed rock)」に達したのであり、さらなる根拠を問うことは控えなければならない、と主張するかもしれない。しかしながら、諦める前に根拠を探す努力をすることは無意味ではない。

そこで視点を変えて、本節では解釈 C と解釈 Q 自体の性質の違いが解釈 C を支持する根拠とならないかを検討してみたい。解釈 Q が付与する意味を持った代数の言語を「言語 Q」、解釈 C が付与する意味を持った代数の言語を「言語 C」と呼ぶことにしよう。言語 Q は言語 C と比較して問題があるのではないだろうか。

クリプキの懐疑論についての膨大な文献の中でも、解釈自体の性質はほとんど言及されてこなかった。言及されることが少なかった最大の理由は、これまでは対立解釈の具体例が存在せず、対立する解釈の性質を比較しようとしても、空想に頼る他なかったからである。だが、解釈 Q の登場によって、私たちは実例を用いて比較することが可能となった。本論では、その利点を活かしたいと考えている。第二の理由は、クリプキ自身が、単純性をはじめとする解釈自体の特徴を、正しい解釈を選択する際の理由とすることに反対して

---

[7] 実際には、先例として引き合いに出すことができるのは、過去の言語使用の実例の中でもスタンダードな用例だけである。ヴァーヘッゲンは、共同体の関与が無ければスタンダードな用例を特定することができないと主張する(Verheggen 2007)。私はこの考えには賛成しない。適切な先例と不適切な先例を分かつために、共同体が何か特別な儀式を行うわけではないからである。何がスタンダードな用例となるかは、過去の使用の経歴を丹念に見ていかなければ分からない。使用頻度の違いや、使用を訂正する実践の存在が、スタンダードな用例とそうでない用例を分かつメルクマールとなるだろう。だがこの点に関しては、共同体における言語使用と孤立的な言語使用との間で異なるところはないのである。

いるからである（Kripke p. 38 [邦訳 72f]）。クリプキの主張については5節で批判的に検討することとし、本節では言語Cと言語Qの性質を比較するため、複雑性、現実との整合性、計算の利便性という3つの観点から両者を比較していくことにしたい。

### 4.1. 複雑性は同等である

言語Qはまず、その内在的特徴において言語Cよりも劣っていると言われるかもしれない。例えば、言語Qは言語Cよりも複雑ではないだろうか。ハンフレーは、プラス関数よりクワス関数の方が複雑であるのは明らかであり、単純さの違いによって決定不全性は排除できると主張している(Humphrey 1999)。だがハンフレーは根拠を示しておらず、複雑性の比較を言語全体ではなく、一つの単語（つまり「+」）だけで行っている点で、根本的な欠陥がある。

2節で述べたように、解釈Cと解釈Qはほぼ対照的に相互定義可能である。このため、言語Cと言語Qを全体として比較すれば、言語Cと言語Qの内在的特徴には非対称性が存在しないということが帰結するだろう。グッドマンは、グルーとブリーンの概念と、グリーンとブルーの概念は相互定義可能であり、一方から他方を定義する際に、時間に言及しなければならない点で定義は対称的であるという点を強調し、両者の概念としての対等性を擁護した(Goodman 1983, pp. 72-81)。これと同様に、相互定義可能性は次のような相互性を明らかにする。言語Cから出発した人は、言語Qが言語Cから定義されるということで、言語Cより言語Qの方が複雑だと考えるだろう。しかし言語Qから出発した人は、言語Cが言語Qから定義されるため、言語Cの方が複雑だと考える。このことは、言語Cと言語Qの複雑性は観点相対的だということを意味しているように思われる。

単に相互定義可能性が成り立つだけでは、次のような反論があるかもしれない。例えば、談話領域を人間に取ると、〈子供、男〉という概念群は、〈少年、少女、成人男性、成人女性〉という概念群と相互定義可能な関係にある。少女は子供かつ男性でないものとして定義可能であり、子供は少年または少女であるようなものとして定義可能である。しかし、定義に用いる論理結合子は、片方では連言、他方では選言というように非対称性が存在している。ある種の哲学的立場からは、真に単純な概念群は、それとその否定の連言によって他のあらゆる概念を定義できるのでなければならない、と主張されるだろう[8]。

[8]要素命題の存在を仮定した『論理哲学論考』のウィトゲンシュタインは、上述の非対称性を重視する立場であったと解釈できる。但し、ウィトゲンシュタインが注目していたのは概念ではなく命題であった。要素命題とは、論理的に相互独立であり、論理演算子で連結することで、可能なあらゆる事態を記述することができるような命題群のことである。Xが少女であることとXが少年であることは論理的に矛盾するため、これらは相互独立性の条件を満たさない。対して、Xが子供であることとXが男であることは相互独立であるため、要素命題の候補となりうる。要素命題は、それらの命題またはその否定の連言によって、

しかし、言語 Q はこのような批判も免れている。なぜなら、言語 C と言語 Q は単に相互定義可能なだけではなく、ほぼ対称的に相互定義可能だったからである。(2.2), (2.3), (2.4), (2.5)に示されているように、言語 C から言語 Q を定義する場合と、言語 Q から言語 C を定義する場合で論理結合子の使われ方は対称的であり、上記のような哲学的立場の妥当性を認めたとしても、非対称性は存在しないのである[9]。

---

あらゆる可能世界を特定できるような命題群でなければならないのである。

[9] Delancey は最近、クワス算のような非標準的解釈は標準的解釈よりもコロモゴルフ複雑であると主張した(Delancey 2007)。コロモゴルフ複雑性とは、ある事柄の複雑性を、それを BASIC のようなプログラム言語で再現するのに必要なプログラムの文字数の最小値として定義するものである。プログラム言語は万能計算機の中から任意に選んでよく、万能計算機は別の万能計算機をエミュレートできるというよく知られた事実から、コロモゴルフ複雑性はプログラム言語の選び方によって高々有限なある数値以上異なることが無いことが証明できる。

ところが、相互定義可能性によって、コロモゴルフ複雑性には非対称性がないことが証明できる。例えば BASIC では、＋の計算を実行するプログラムの方が、Q+の計算を実行するプログラムよりも短く書くことができる。ここで、BASIQ という別のプログラミング言語を考えることにしよう。この言語では全ての演算記号が、BASIC において意味するものを Q 化した意味を持っている。つまり”+”が演算 Q+を表すという具合である。

解釈 C と解釈 Q が相互定義可能であるという事実から、BASIQ は BASIC と同等の資格でコロモゴロフ複雑性を測る物差しとすることができることが判明する。まず解釈 Q が解釈 C から定義可能であるため、BASIC を実装する装置を作れるなら BASIQ を実装する装置も作ることができる。さらに、解釈 C が解釈 Q から定義可能であるという事実は、BASIQ が BASIC をエミュレートできることを保証する。これより、BASIC が実装可能な万能計算機の言語であるなら、BASIQ も同様であることが帰結するであろう。そして BASIQ においては、Q+のプログラムの方が+のプログラムより短く書けるのは明らかである。基準とするプログラム言語の違いによって生じる定数分の揺らぎは、ここでは致命的である。相互定義可能性によって、Q+を+よりもコロモゴロフ複雑であると結論付けるようなプログラム言語がある時にはいつでも、複雑性の順位が逆転するようなもう一つのプログラム言語を最初のプログラム言語から構成できることが証明できるのである。

Delancey は、基準とするプログラム言語によって、コロモゴルフ複雑性が逆転しうるという可能性に気づいていた(ibid., p. 239)。その上で、いかなるプログラム言語が人間の脳に実装されているかは物理的事実であり、実際に実装されているプログラム言語を用いて、真のコロモゴルフ複雑性の値が決定できると主張する。しかし BASIC と BASIQ は、実装可能性においては差がない。また、脳に実装されているプログラム言語を決定する事実というのがあるとしたら、それは「＋」の意味が加算であるか Q+であるかを決定する事実で

相互定義可能性からは、言語 C と言語 Q の表現力が等しいということも帰結する。一般に B を用いて A が定義できる時、A を用いて表現できることは B を用いても表現できる。すなわち、B の表現力は A の表現力以上である。言語 Q と言語 C は相互定義可能であるから、言語 Q で表現できることは、言語 C を用いても表現でき、逆もまたしかりである。このことから、両者はちょうど等しい表現力を持っていることを意味している。

相互定義可能性は、榊原の解釈 Q がたまたま持っている特徴であり、対立解釈が一般に満たす性質ではないという反論があるかもしれない。この指摘は正しい。だが実際に解釈 Q が存在する以上、複雑性という基準だけでは、対立解釈の中で解釈 C だけが同順位を破る(break tie)ことはできないことは、明らかになった。

### 4.2. 解釈 Q は実生活において齟齬が出ない

言語 Q を用いる人は、これまでは現実世界との不整合が露呈しなかったとしても、将来現実世界との齟齬を来すのではないか、という疑念を抱く人がいるだろう。将来破綻することが予期されるなら、それは悪い規則である。関数 q が (2-1) によって定義される場合、言語 Q においては、”700 + 500 = 1400”は真である。だがリンゴ 700 個とリンゴ 500 個を合わせたらリンゴは 1200 個だから、Q+は現実と計算が合わないのではないだろうか。

ある者は、「計算が合わない」という語の意味も再解釈すればよいと示唆するかもしれない。だが、計算が合わないことは、ある人の「計算が合わない」という発言がある解釈 Q のもとで真であるかどうかという問題と同じではない。誰が何と言おうと、1200 が 1400 より小さいのは端的な事実である。そして計算のずれは、時に死活問題(matter of life or death)となるのである。

別のある者は、計算が合わなくなるのは非常に大きな数の場合だけであり、実生活でそのような大きな数に遭遇することはないので、影響は無いと考えるかもしれない。しかし、実践上無視することができるとしても、ゼロではない差があることは否定できないだろう。

ところが、そもそも言語 Q は実生活で齟齬が生じないのである。鍵は、数の概念も Q 化されるという点にある。集合 S の要素の数、すなわち濃度を Num(S)と表すとすると、Q 化された数、すなわち QNum は次のように定義される。

$$\mathrm{QNum}(S) \stackrel{\mathrm{def}}{=} q(\mathrm{Num}(S)).$$

---

もあるだろう。ところが、そのような事実こそ私たちが探していた当のものであり、その存在が疑われていた当のものなのである。Delancey の議論は、クワス関数はプラス関数と比較して奇妙であるという直観を、BASIQ は BASIC と比較して奇妙であるという直観にそのまま平行移動しただけである。コロモゴロフ複雑性の概念を持ち出しても、哲学的な洞察は深まらないのである。

数えるという概念も同様に変換される。例えば、箱 A には 700 個、箱 B には 500 個のリンゴが入っていたとしよう。この時、言語 C の話者は、「箱 A のリンゴを数えたら 700 個だった。箱 B のリンゴを数えたら 500 個だった。700 + 500 = 1200 である。実際に一緒にして数えてみると 1200 個のリンゴがある」と言うだろう。一方言語 Q の話者は、「箱 A のリンゴを数えたら 700 個だった。箱 B のリンゴを数えたら 500 個だった 700 + 500 = 1400 である。実際合わせて数えてみると 1400 個ある。」と言うだろう。QNum は、クリプキが「数える」ことをくわぞえる(quount)ことに再解釈すればよいというクリプキのアイディアを、より厳密な形に定式化したものに他ならない（Kripke 1982, p. 15f)。解釈 Q を適用しても、計算と現実の間に齟齬が生じることはない。演算における意味の変換が、数や数えるといった概念における意味の変換と完全に嚙み合っているからである[10]。

### 4.3. 解釈 Q は部分計算が成立しない

前節までで、言語 Q と言語 C は言語の複雑性や表現力、現実との対応関係では優劣がつけられないことを論じた。しかし、言語 C と言語 Q は真な文の集合が異なり、それが優劣の差をもたらす。以下では、その一つを示すことにしよう。

私たちは、大きな数の表記の全体を見ることができない時に、一部の桁の数字だけを見て部分的な計算をすることがある。これを「部分計算」と呼ぶことにしよう。例えば 2 つの自然数が、“…6” と “…2” であれば、大きい位の値が何であるかにかかわらず、その和は “…8” となる。言語 C では加減乗除やより複雑な演算において、様々な部分計算が可能である。

一方、言語 Q では部分計算は不可能である。例を挙げよう。関数 q が 2-1 のように定義される時、“…6 + …2 ＝ …8” は一般には成立しない。というのも、“16 + 12 = 28” だが、“1016 + 12 = 1040” だからである[11]。

---

[10] 現実との齟齬が無いということは、解釈 C と解釈 Q にはノミナルな違いしかないということである。逆に、現実と整合する解釈 C と対立解釈にノミナルでない違いがある場合、対立解釈は現実との整合性がどこかで破綻しているはずである。この場合、現実との整合性という点では、その対立解釈は解釈 C より劣っていることになる。とはいえ、過去の全ての発言と整合的でありながら、現実との齟齬が生じるような対立解釈が実際に存在するかどうかは、今のところ明らかではない。

[11]代数の文の中には、例えば「任意の自然数 x、y、n について、x の第 n 桁目の数が 6 で、y の第 n 桁目の数が 2 の時は、x と y の和の第 n 桁目の数は 8 または 9 である。」という文のように、部分計算可能性を表現する文がある。これらの文は、屈曲点より大きな数を表す数字を含まないため、解釈 Q において真となるはずである。しかし、このことは言語 Q で部分計算が不可能であることと矛盾しないだろうか？

一見したところの矛盾は、「x の n 桁目の数」というのが一種の関数表現であり、解釈 Q

部分計算の不成立は、解釈 Q に限らず、対立解釈の一般的特徴である。このことは次のように証明できる。クリプキが想定している対立解釈は、私たちがまだ直面したことのない大きな数の計算において、標準的解釈と異なる計算結果を導くのであった。計算結果が異なるということは、計算結果の数字表記のいずれかの桁の数字が、標準解釈と異なるということである。さらに、解釈 C においては部分計算が成り立つ。それゆえ、解釈 C と計算結果の数字表記が異なる所では、対立解釈は部分計算が成り立たないはずである。

部分計算可能性は、絶対的な善ではなく、一定の観点に相対的な善である。全知の神は、このような差異には価値を見出さないだろう。しかし数字の一部だけを見て計算の一部ができるということは、認識に限りのある私たちにとっては、ささいではあるが無視できない利点である。部分計算可能性という観点が興味深いのは、差異が私たちの能力ではなく、能力の欠如によって生じるという点である。部分計算可能性が利点となるのは、日本人やアメリカ人など、特定の共同体のメンバーに限られたことではない。これは人類にとって、ひいては、人類と同等の認知的制約を共有する知的生命体全てにとっての共通善なのである。

## 5. 良さから正しさへ

前節までの議論で言語 Q よりも言語 C の方が私たち人間にとってより良いということが示されたものとしよう。これを踏まえて、私は、懐疑論者に対して、「「＋」は Q+ではなく加算を意味する。なぜなら「＋」が Q+を意味したら、「＋」が加算を意味した場合と異なり、部分計算可能性を満たさないからである」と応戦できると主張したい。言語 Q には問題があり、言語 C の方がより良いということを根拠として、解釈 Q ではなく解釈 C を採用すること、ひいては「57+68」に対して「125」と答えることは正当化される、というのが私の主張である。

---

においてはQ化されなければならないという点に気づけば解消される。Q化の指針に従い、

$$x\text{の}\,n\,\text{桁目の}\,Q\,\text{数} \overset{\mathrm{def}}{=} q\left(q^{-1}(x)\text{の}q^{-1}(n)\text{桁目の数}\right).$$

となる。これにより、解釈 C において部分計算可能性が成り立つことを意味する文が解釈 Q においても真でありながら、なぜ言語 Q では部分計算ができないのかが明らかとなる。その理由は、人類の知覚能力では、ある数 x の表記の右から n 番目の数記号を見ただけでは、x の第 n 桁目の Q 数が何であるかが分からないからである。たとえば、504 の第 1 桁目の Q 数は 4 であるのに対し、1004 の第 1 桁目の Q 数は 2 である。したがって“-----4”と書かれているのを見ただけでは、その数の第 1 桁目の Q 数が 4 であるかどうかは分からないのである。

言語のあらゆる意味が予め決定されているわけではないだろう。「ゲーム」のように、家族的類似性を撚り合わてできた概念の場合、その外延には本質的に曖昧性が残る。新しい境界事例 X が、典型的にゲームであるような A とは似ているが、B とは似ていないということがある。この場合 X をゲームと呼ぶかどうかは、判断の問題である以上に決断の問題である。『語る、とはいかなることか』においてオースティンがかつて論じたように、境界があいまいな概念を対象に適用する際には、言語行為自体に「先例による規約(legislation by precedent)」あるいは「判例法(case law)」の契機がある(Austin 1952, p. 149)。境界事例に言及する言語使用は、その後の言語行為がこれを基準に正誤の判定を受けるが、その言語行為自体は正誤の評価を受けないという意味で、規則に従う(rule following)行為ではなく、規則を決定する(rule determining)行為なのである。だが代数学においては、上述のようなあいまい性は存在しない。本論の主張は、少なくとも代数学においては、記号の使用法は決定しているということである。

以下では、本節の主張に対する反論を一つ一つ検討していきたい。第一に、私たちは普段、言語 C と言語 Q の良さの違いを引き合いに出して、特定の言語的振る舞いを正当化するということをしないのではないか。日常では、「57+68」の正しい答えが「125」であることを他人に納得させるには、「+」の使い方の実例を 2、3 示すだけで十分であり、意味の良さが言及されることはないだろう。だが、日常の場面で意味の良さに言及がなされないのは、解釈 Q のような可能性が想定されていないからである。一方懐疑論者は、実例をいくら持ち出しても納得せず、解釈 Q という手の込んだ例を提示してきた。懐疑論者の問題提起は、普段は暗黙の前提となっているステップを顕在化させる。懐疑論者の問いが非日常的なものである以上、懐疑論者に対する応答も非日常的なものになるのは避けられないだろう。

第二の反論は、前節で予告されていたものである。クリプキは、対立する解釈の単純性の差に基づいて決定不全性を克服しようとする試みを、「懐疑的問題というものに関する誤解、あるいは、単純性を考慮する事の役割に関する誤解に、あるいはその両方に基づいている」と攻撃した(Kripke 1982, p. 38 [邦訳 p. 72])。前節で、言語 C と言語 Q の単純性（複雑性）には差がないことが示した。しかしクリプキの批判は、解釈自体の特徴に言及することで、特定の解釈を排除、あるいは正当化しようとする戦略一般にあてはまると思われるため、ここで取り上げたい。

クリプキは、「二つの競合的な仮説が本物の仮説ではなく、純粋に事実について言明しているものでないならば、「単純性」を考慮しても、それがそれらの仮説を本物の仮説に、純粋に事実について言明しているものに、しはしないであろう。」と述べる(Ibid., p. 38[邦訳 p. 73])。クリプキのこの主張は、論点先取を犯している。というのも、そもそも我々は、意味についての仮説が純粋に事実について言明しているものと言えるかどうかを検証している最中だったからである。単純性を考慮することで意味を確定できるなら、それによって意味の実在論が立証できるのではないだろうか。クリプキは、単純性は意味の事実の決定

に関わらない、という本来論証によって導出しなければならないテーゼを、理由を挙げずに前提としてしまっているのである。

だが、クリプキの考えを補うことは可能である。意味の実在性が問題となっている時に、解釈の単純性を、解釈選択の基準に組み込むことを拒否することには理由がある。その理由とは、我々が複雑な解釈より単純な解釈を選好するのは、その方が我々にとって便利であるからに他ならず、解釈がより単純であるということは、解釈が真である確率をいささかも高めるものではないということである。

同種の議論は、科学的実在論の文脈ではおなじみのものである。ファン・フラーセンは、観察可能なデータと整合するという経験的十全性の条件だけからでは、観察不可能な対象を含む理論を一意に決定することはできないと論じ、科学的実在論を否定した[12]。ファン・フラーセンの科学的反実在論が、クリプキの懐疑論とパラレルなのは明らかである。クリプキは非志向的事実からは言葉の解釈が一意に決定できないと論じたが、ファン・フラーセンは観察可能な事実からは観察不可能な対象を含む理論を一意に決定できないと論じた。理論の単純性といった基準を追加すれば、複数の経験的に十全な理論から一つの理論を絞り込める可能性はある。だがファン・フラーセンは、「世界は複雑であるよりも単純である可能性の方が高い、と考えるのは（通常、科学的な推論における正当な要因とは認められていない、ある種の形而上学的あるいは神学的見解をとるのでない限り）たしかにばかげたことである」と述べ、この方途を拒絶した[13]。ここでいう「ある種の形而上学的・神学的見解」とは、世界は単純である、という証明しようのない仮定である。

だが、言葉の意味の問題と、理論的対象の問題を同様に扱うのは誤りである。科学理論が扱う世界のあり方は、私たちの認識や実践とは独立に定まっていると考えるのが自然である。対して、言葉の解釈が扱うのは我々自身の実践である。言葉の意味が、言語の使用者である私たちの認識や実践と独立に定まっていると考えるのは馬鹿げている。

科学理論の場合、経験的に十全でかつ有用な理論が、それでも世界のあり方に照らして偽である、と考えることには意味があるように見える。だが意味の場合、先例に従っており、なおかつ有用性の観点からも最適な解釈が、私たちの与り知らぬ超越的な何かに照らして偽である、と考えることは意味をなさないだろう。言語の使用は人間の行為であり、言語は我々の思考やコミュニケーションの道具なのだから、私たちにはより有用性が高いものを採用する実践的理由がある。そしてより重要なことは、言葉の場合それ以上の何かは存在しないのである。我々は、科学的実在論と科学的反実在論の両者が共有している超越的実在を否定するという意味で、言葉の意味に関して反実在論（ある種の構成主義）の立場を取るべきだということである。我々の実践とは独立した、意味についての超越的な

---

12 van Frassen (1980). 決定不全性については、特に邦訳 p.. 118-128 を見よ。
13 同書 p. 167. 単純性についての同様の扱いは、クワインにも見られる。W. V. Quine, “Reply to Roger F. Gibson, Jr.” in The Philosophy of W. V. Quine (LaSalle, IL: Open Court, 1986)p. 155 を見よ。

事実が否定されるがゆえに、解釈 Q と解釈 C の良さの違いは、言葉の意味の決定に構成的に関わることができるのである。

したがって、クリプキに対しては次のように反論できるだろう。言葉の意味についての問いが、我々の価値や実践と独立の存在についての問いであるならば、判断を正当化するために意味の良さを引き合いに出すのは的外れである。しかし、言語的活動は我々の実践であり、言葉の意味についての判断は、我々の価値観を巻き込んだ実践的な判断とならざるをえない。それゆえ正しい言語使用を判断する際に、私たちは意味の良さを根拠として挙げることができるのである。

第三の反論は、将来私たちが「＋」を＋の規則ではなく、Q+の規則に従って使用するようになる可能性に言及する。悪法もまた法であるということに示されているように、良いことが必ずしも正しいことであるとは限らないのである。そうだとすると、“1016+12=1040”と答えるのは、意味の良さには反しているが、言語の規則に違反していることにはならないのではないか。

確かに、「1016 + 12 = 1040」と答えるのが「＋」の正しい使い方とされる、悪い慣習が将来定着してしまう可能性は論理的には排除できない。だがこのことは、「1016 + 12 = 1040」と言うことが、現時点での言葉の正しい用法であるということを意味しない。このことは次のような想像をすると明らかである。これまでに 1000 よりも大きな数の計算をしたことがない現代人がタイムマシンに乗って、「1016 + 12 = 1040」が正しいとされるようになった未来を訪れた場面を想像してみてほしい。この時現代人は、未来の世界でそのような悪習が広がっていることを嘆くに違いない。しかし、その悪習を自分自身が共有しているとは考えないだろう。むしろその現代人は、「＋」の意味が現代と未来とでは変化してしまったと考えるだろう。正しさが良さから逸脱しているという知見は、未来の用法が現代の用法とは異なると判断する根拠になるのである。従って上述の可能性は、「＋」の意味が将来変化する可能性に過ぎないことになる。意味が変化した後は、なるほど「1016+12=1040」と答えるのは正しい。だが意味が変化する以前に「1016+12=1040」と答えることは、やはり言語規則に反していることになるのである。

この思考実験は、傾向性や未来の言語使用を現在の言語使用の正当化に用いることができないという 3 節の論点を拡張したものである。タイムマシンの思考実験で明らかになったことは、単に将来ある仕方で言葉が使用されるというだけでなく、自分達のコミュニティの中で将来その使用法が広く受け入れられるようになるということを予め知っていたとしても、そのような未来の事実を現在の言語使用を正当化するために参照することはできない、ということである。ある言語使用の事実を現在の言語使用の正当化に用いることができるようになるのは、それが「先例」として参照できる未来の地点が到来してからである。

最後に第四の批判として、解釈 Q は解釈 C の対立解釈の一例にすぎず、全ての可能な解釈の中で解釈 C が最も良いことを証明したわけではない、という指摘がある。というのも、

解釈 Q が対立解釈の全ての可能性を尽くしていると証明されたわけではないからである。この指摘はもっともである。私の議論は実例に基づいたものであり、包括的で決定的な反駁にはなっていないということは認めなければならない。とはいえ、この指摘の効力はある程度まで弱めることができる。

現時点では想像力に頼るしかないが、解釈 Q 以外の対立解釈の多くは、先例との整合性を維持するために、意味の良さを犠牲にすることになるのではないかと推測される。対して解釈 Q は、可能な対立解釈の中でも特に優れたものである。というのも、解釈 Q は整合性の条件を満たすだけでなく、解釈 C と相互定義可能であり、現実世界でも齟齬を来さないという追加的に良い特徴を備えた解釈だからである。本論で示されたのは、その解釈 Q においてさえ、部分計算可能性を満たさないという欠点があるということである。さらに、この欠点は解釈 C 以外の全ての対立解釈に共通しているということも示された。したがって私は、意味の良さが、対立解釈の選別に関与する一般的な論点であることを示せたと考える。解釈 C は、現時点で手に入る唯一の対立解釈の具体例である解釈 Q よりも良い。懐疑論者がさらなる反論を企てるためには、解釈 C より良い解釈の実例を示す必要があると思われる。

本論の結論が、クリプキの共同体説とどれほど異なっているのかを最後に確認しよう。クリプキは、上述の議論の末に、彼が懐疑的解決(skeptical solution)と呼ぶものに到達し、言語は共同体の実践を離れては存在しない、と主張した。クリプキが共同体を重視するのは、言語の規則に従うことと従い損ねることの区別は、我々が共同体の成員（member of a community）であることによってはじめて生じると考えたからである。対して私は、言語が私たちの実践を離れては存在しないことは認めつつ、それが共同体の実践であることは必須要件ではないと論じてきた。なぜなら意味の良さという、人類の成員(member of humanity)であれば誰もが尊重するべき正当化の根拠が、言語の正しい使用と誤った使用を分かつと考えられたからである[14]。クリプキの結論も、私の結論も、私たちの認識や実践と

---

[14] 同様の主張はデイヴィースによってなされている(Davies 1988)。彼は“Crusoe 2 [lifelong Crusoe] might establish and follow rules, despite his not being a member of any social community, in virtue of his membership (by birth and natural growth) in the community of mature human beings”と述べる(p. 62)。デイヴィースは、計算にクワス関数のようなものを用いるのは、単に反社会的(ant-isocial)なだけでなく非人間的 (inhuman)だと主張する。ウィトゲンシュタインは『算術の基礎』において、「算術は結局のところ人類的な(anthropological)現象であると」述べた(Wittgenstein 1956, V 26)が、これも関連する主張と解釈することができるかもしれない。だが、これまで算術がいかなる意味で人間的な現象であり、クワス算がいかなる点で非人間的であるのか、その理由は明らかにされてこなかった。本論が提示する意味の良さという論点は、この欠陥を埋めるものと位置付けることができる。

独立の意味の事実を否定するという点では共通している。だが言語にとって共同体が不可欠であると考えるかどうかについて、両者は決定的に異なっているのである。

## 6. 結論

本論では近年榊原が例示した代数の対立解釈の一例である解釈 Q と標準的解釈 C を比較し、解釈 C を採用することを正当化するようなものがあるかどうかを検討してきた。先例は、解釈の正しさを示す際に参照できるものの一つであるが、解釈 Q と解釈 C は全ての先例と整合的であるため、先例だけでは同順を破ることができない。また傾向性は、言語使用を正当化するという役割を担いえず、むしろ他のものによって正当化される必要があるため、役に立たない。

そこで対立解釈自体の性質に着目し、解釈 C と解釈 Q が比較された。その結果として、両者は複雑性は同程度であり、どちらも現実と合致するが、解釈 Q は部分計算が不可能であるという点で、解釈 C よりも劣っているということが判明した。言語使用は我々の実践であるため、この相対的な望ましさの違いは、解釈 C の選択を正当化する実践的理由になる。

クリプキは、規則の適用は「正当化を欠く暗闇の中の跳躍」であるため、正しい言語の使用と誤った使用の区別を維持するためには、共同体における一致が不可欠であると結論付けた。私の結論はこれに真っ向から反対するものである。解釈 Q という具体例は、先例に加えて意味の良さを参照することで、特定の言語使用を正当化することができるということを示唆している。したがって、言語活動が規則遵守の実践となるために、共同体における多数派の一致を持ち出すことは不要であるように思われる。

## 参考文献


Austin, J.L., 1952. How to Talk. Some Simple Ways. Proceedings of the Aristotelian Society 53, 227 - 246.

Boghossian, P.A., 1989. The rule-following considerations. Mind 98, 507-549.

Boghossian, P.A., 2004. The normativity of content. Philosophical Issues 13, 31-45.

Davies, S., 1988. Kripke, crusoe and Wittgenstein. Australasian Journal of Philosophy 66, 52-66.

Delancey, C.S., 2007. Meaning naturalism, meaning irrealism, and the work of language. Synthese 154, 231-257.

Goodman, N., 1983. Fact, fiction, and forecast. Harvard University Press.

Hattiangadi, A., 2006. Is meaning normative? Mind & language 21, 220-240.

Humphrey, J.A., 1999. Quine, Kripke's Wittgenstein, simplicity, and sceptical solutions. The

Southern journal of philosophy 37, 43-55.
Kripke, S.A., 1982. Wittgenstein on Rules and Private Language. Harvard University Press.
Quine, W., 1986. Reply to Roger F. Gibson, Jr. The Philosophy of WV Quine, 2nd exp. ed. LE Hahn and PA Schilpp (eds.), 155-157.
Sakakibara, E., 2012. Incarnating Kripke's Skepticism About Meaning. Erkenntnis, published online.
Tennant, N., 1997. The Taming of the True. Oxford University Press.
Van Fraassen, B.C., 1980. The Scientific Image. Oxford University Press.
Verheggen, C., 2007. The community view revisited. Metaphilosophy 38, 612-631.
Wikforss, A.M., 2001. Semantic normativity. Philosophical Studies 102, 203-226.
Wittgenstein, L., 1922. Tractatus Logico-Philosophicus. Dover Publications.
Wittgenstein, L., 1953. Philosophical Investigations. New York,Macmillan.